
私が得た世界

陽華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が得た世界

【Nコード】

N2934E

【作者名】

陽華

【あらすじ】

17年間、化け物として国に使われていた少女が見た世界は、とても穢く、とても美しかった。

chapter 0 - 1 : 普通を望む世界

初めて　　を壊したのは、幽閉されてから1ヶ月後。
ターゲットは、産まれたばかりの赤ん坊だった。

あの子も、私の仲間だったのに……。
なのに、あの子は私のせいで、小さな冷たい塵^{ユミ}と化した。

それから17年間で、私はいくつの塵を作り出したのだろう。彼らは私の色を流しながら、憐れむ様に朽ちてくのだ。

カリナ暦67年。

物語はここから始まる。

この世界は、正常を望んでいた。私からしてみたら、何が正常で何が異端なのだろう。

世界は3つの大陸から成り、それを一つに纏めているのが、セントラル・カリナだ。

全ての理がここから成り立ち、そして思うがままの国。

私はそこに居る。

誰にも知られず、誰にも認められず、暗い塔で存在している。

唯一世界を覗けるのは、塵を作り出す時のみ。体を清め、この時だけ衣を纏い、そして言われるがまま、塵を作り出す為だけに赴く。
逃げる事はしない。私が逃亡する事は、
を奪われるから。

……
とは、何だっただろう。

まあ良いや。どうせ私は、化け物だから。

彼等が固執する、平凡からは欠け離れた化け物。

この眼も、この体も、流れる血も、全てが化け物だから

chapter 0 - 2 : 使命

我等が崇め、我等の全てである神は何に於いても平等に授けて下さった。

それにより、時の流れ、肉体の限界、魂の再来、これらは皆が同じ瞬間に迎えていた。悲しみ、喜び、憂い、憤り、様々な感情を分かち合っていた。その中でも我等・ヒト・は、平等な筈の神が氣に入る程の高等種族として存在し、神の創りし楽園・エデン・の主となる。それがこの世界、・ルディアーデ・アフエクシア・である。

しかし、何が切っ掛けとなったのだろうか。我等・ヒト・の中に異端が産まれた。初めは唯一人であったそれは、次第に数を増やし我等に紛れる知恵を身につけ始めたのだ。

我等は必死にソレ等を排除しようとしたが、知恵を付けたソレ等は、ずる賢く、傲慢であった。

そして遂に、神にその存在を知られてしまう。神は嘆き悲しみ、我等を信頼するからこそその試練を与えなされたのだ。

異端を滅殺する使命と、異端が楽園に住み着くのを許した罪として、滅殺し終わる迄我等に不平等な命の時と、分かち合えない心を。

我等が再び神に愛される為には、全ての異端を排除しなくてはならない。

異端を許してはならない。

何故なら異端は、神に仇なす者だからだ。

その身は穢れ、その心は淀み、我等の父を受け入れない異端。

全ては我等の、そして神の為

『アフエクシア神書 意義』より

「はっ！！なあにが、使命だ。馬鹿馬鹿しい。」

そう言うや男は、神聖な作りの分厚い本を乱暴に投げ捨てた。

それは鈍い音をたて床へと落ち、音もなく焼失する。

それを冷たい眼で一瞥し、男は視線を別の場所に移す。そこには、遙か天へと聳え立つ塔が僅かに存在を主張していた。

まるで、誰かに気付いてもらえる様、遠くまで訴えかけているかの

ようじ。

「皮肉なもんだ。神に一番遠いもんが、天に一番近い場所にいるんだからな。」

彼の呟きが塔に届く事は勿論ない。そしてこの男も、塔の中からの叫びに気付く事は無い。

「さつきから、何をぶつくさ言ってるの？」

そんな男の元に、小柄な少女が問い掛けた。

「ん？」

だが、男が答える前にその視線を机の上と僅かに焦げ痕が残る床にやると、少女は怒りに体を振るわせ、そして爆発した。

「あー！私まだ読んで無かったのに！！！！」

大粒の涙を溢しながら、あどけなさの残る瞳できつく睨んだ。一見微笑ましい兄弟喧嘩ともとれる光景だが、少女の手に握られていた小型銃が不気味に笑っていた。

「ちよっ！！あんなに読む価値もねえだろが！つか、それ下ろせっ！！」

少女が暴走すると中々止められない事を身に染みて知っている男は、内心舌打ちをしながら解決策を模索していた。しかしその苦勞を無駄にするかの如く、少女は主張するのだ。

「読んで滅茶苦茶に破るのを、楽しみにしてたのにつ……！」

ああ、終わった

一瞬、人生を諦めた男であったが、直ぐに少女好みの”面白い噂”を思い出した。

これが駄目なら実力行使するしかないが、一か八かの賭けにでてみる事にする。

「そ、そっぴやな……！」

切り出した瞬間、今にも引き金を引こうとしていた指がピタリと止まった。

男がこの好機を逃す訳がない。

「聞いたか？最近裏で騒がれてる、面白い噂があんだよ……！」

「面白い、噂？」

案の定、噂好きの少女が食い付いた。

それにしても、この少女に限らず、女という生き物は、どうしても噂が好きなのだろう。

まあ、この疑問は、目の前の危機から逃れてからゆっくりと考えよう。

男は勿体ぶるかの様に深呼吸をし、そして不適に笑った。

「孤高の塔の赤い怪物の伝説さ。なんでもその伝説、事実らしいぞ。しかも、だ。その怪物は、俺等の仲間　　異端らしいぞ」

物語は、静かに動き出す。

prologue - 3 : 化身

やっと、終わったか……

不気味な程に神聖なその塔の最頂、この世界で一番天に近いと唱われる場所にそれは繋がれていた。

衣服を纏わず、産まれたままの姿で、雨風を防ぐ屋根すらも無いその場所で、痩せ細った四肢が鎖で繋がれていた。

それは僅かに胸を上下させており、確かに生きてはいたが、月明かりに照らされた瞳は、死人同然であった。

彼女自身、そうなってまで生にすぎる理由をとくに忘れてしまったのだろう。

先ほどの様に、化け物と罵りながらも自身を貪る男達を受け入れ、自身と同じ境遇の仲間達を戸惑いすら感じずに手に掛ける事が、この17年で当たり前になってしまった。

そして、それをまるで他人事のように”傍観”するのは、心を失ってしまったからだ。

「まだ、続くのか？」

小さく呟き、彼女はその瞳を閉じた。

その背に、妖しく月明かりに照らされる彼女が化け物である証、深

紅の大翼を携えながら。

異端を嫌う世界は、このセントラルを中心に長年に渡り、異端を排除すべく様々な手を打ってきた。しかし、どの計画も殲滅まではいかず、そして17年前。一人の神官が唱えた案により、彼女は囚われる事になる。

その計画とは、名を

「イレイシス」。

異端は、人外の力を持つ者が多く、生身の”平凡”な人間が立ち向かうには強大であった。その為、一人の異端を排除する際には数十の命が毎回失われていたのだ。

しかしこの計画により、この17年での犠牲者は0となっている。最も、ただの人間の犠牲者は、だが。

「イレイシス」は、単純に異端と異端に殺し合いをさせるのだ。セントラルが数名の異端を生け捕りにし、それを飼い慣らして道具として使う。

その道具の中に、彼女もいた。彼女は、イレイシスとして最年少でそして最強だった。この17年で、23人いたイレイシスも、今では彼女のみとなっている。

さらに不幸であったのが、彼女は美しかった。人間としても、異端としても美しすぎた。

流れる黒髪、ルビーを思わせる瞳、薄い唇、象牙色の滑らかな肌、深紅の翼は異端には女神に。

そして、人間の男にとっては、都合の良い欲望の捌け口として。そんな彼女には、記憶が無かった。

彼女の記憶の始まりの日は、人生の終わりの日だったのだ。

こんな化け物にも人間にもなれない彼女は、今日もまた、人間の道具として使われる日をただ眠って待つ。

食事も僅かしか貰えず、痩せた体に長年繋がれた鎖によるとす黒い痣をさらに濃くし、そして男達に蹂躪されながら

そしてまた、彼女が飛べる日が来る。決して自由には飛べない、可哀想な籠の鳥は弄ばれる日が。

ガチャンッ！！

「起きろ」

それが合図である。

翼の鎖を引かれ、まず体を清めに行く。けれど、温かい湯は彼女の罪と心を洗い流してはくれない。

そして、用意された服へと袖を通すのだ。

黒いドレスは、彼女の美しさを引き立たせる。彼女は、人間の完璧なペットであった。

塔の中間にある一部屋は、彼女が指令を出される場所。塔の中で唯一、生活感のある部屋であった。そこにはクリアの壁で隔たれてお

り、この国の重役がその向こうから彼女に命じる。

「今回のターゲットは、そいつだ」

純白の法衣に身を包んだ男は、彼女の姿を目にもやらずに言った。その言葉に合わせて、彼女の鎖を持つ若者が一枚の写真を渡す。そこに写っていたのは、優しげに微笑む一人の女性。

それを目に焼き付けて、彼女は瞳を伏せた。何故この人なのか、化け物と決められた理由は何なのか。そんな疑問など浮かばない。

しかし、この後の出会いが、彼女と世界を動かす切っ掛けになるのだった。

勿論、彼女はそれを知るよしも無い。

任を受けた彼女は、再び塔の最上に来ていた。今は、その身を縛る鎖は無い。

軽くなった体で風を感じ、暫し仮初めの自由を味わった彼女は、深紅の大翼を羽ばたかせた。

「分かっているだろうな？」

それを黙って見ていた若い兵士は、一言そう告げる。これは、17年続くやり取りだった。

この役をする人間は、何度変わってきたのだろうか。

彼女は、言葉の代わりに自身の首に触れる。
そこに在るのは、黒い首輪。
彼女がここに戻って来る理由。

「行け、アリス」

それを合図に、彼女は闇夜に飛び立った。

黒髪を靡かせ、深紅の翼を羽ばたかせるその女の名は、アリス。
コードネーム - A L S -

何も持たない、儚く美しい悪魔の化身である。

chapter 1 - 1 : 憐れな鳥

「私の護衛を？」

「え、ええ……………」

肩までのブロンドの髪に、良く映えるワインレッドのドレスを着た女性が、メイドの話を聞いて暫し思索していた。

「どんな方？」

質問を受けた初老のメイドは、困惑した様子で答えた。

「それが、青年と少女です。お引き取り願ったのですが、聞き入れてくれないのです。申し訳御座いません。本来ならば、私どもで処理しなくてはならないのですが……………」

メイドがあまりにも申し訳なさそうにするので、その女性は苦笑しつつも、既に自分に起こる事を見透していた。

この女性の名は、ウイスカ。
ウイスカⅡコンツァール。

小さな国の伯爵令嬢であり、そして、アリスが見せられた写真の女であつた。

「そうね。折角だから、此方に通してあげて。」

「ふあゝ！でつかいね！」

ピンクのウェーブの髪を背中揺らし、無駄に女の子チックなワンピースの少女が感嘆の声をあげた。

その隣では、背の高い赤毛の青年が厳しい目付きで佇んでいる。

「しかし、本当に紅い魔物はここにくるの？」

反応を示さない青年に、半ば不貞腐ながらも少女が問い掛けると、青年は頷いた。

「当たり前だろ。この辺りに住む異端は、もうこいつしかいねえって言ってたからな。なんだ？お前は、リクアの読みを疑うつづのか？」

「それは無いけどさ。でも……………」

「あまりにも、堂々すぎるだろ、この異端。」

「うん。でかいね」

「ああ。でかいな」

そつ、青年は厳しい目付きをしていた訳では無い。ただ単に、呆け

ていたのだった。

自分達はばれない様、隠れ家でひっそりと生きているのだが、目の前の建物は普通の者からみても大きく、豪華だ。

一瞬、この差に嫉妬を覚えた二人だったが、すぐに思考を別のものへと変える。

「ねえ、入れてくれなさそうだね。さっきのおばばとか、帰れの一点張りだったし。…………どうすんの？」

その問いに、青年は悪戯に笑った。

「そんな時は、忍び込むに決まってるだろ？」

しかし、青年はそう意気込んだが、彼が言ったと同時に屋敷の門が音も起てずに開いた。

まさか、こんなにもすんなりとは入れるとは思っていなかった二人は、思わず呆気にとられる。

二人ともが、一步を踏み出せず、暫しその場で開いた門を見つめていた。

”なにをしているの？せつかく、正規に招き入れてあげるというのに…………”

するとどうだろう、二人に声を掛ける者がいたのだ。いや、正確には、頭に直接語りかけてきた。

二人はこの感覚を、嫌という程知っている。二人も、仕事の時に良く使用するのだ。

これは、異端特有の力。言葉を介さず、もっと深い所で繋がっている絆の証だ。

彼等が目をつけた者が、はつきりと異端だと分かった今、戸惑い躊躇する必要は無かった。

目的と野望の為、二人は屋敷の門をくぐった。

刻は夕暮れ。この刻はまだ、闇に佇む魔物は、繋がれている。

「アカガキタヨ！」

「ヒサシブリノアカガキタ！」

アリスが空を飛び始めると、その周りを数多の鳥が囲み始めた。夜間は活動出来ない筈の鳥達は、彼女との再会を口々に喜び、嘶いている。

勿論、彼等の言葉を人間が理解出来る訳がない。理解しようとしてもしていない。

しかしアリスは、人との関わりを学ぶ期間が無く、最低限のコミュニケーションも取れない程に言葉も拙かった。しかしその変わりに、彼等との絆を育む事が出来たのだ。

彼等の言語は共通であったので、鳥類だけ無く総ての生き物、言うなれば猛獣から木々、風までもと会話が出来るのだ。だが、彼女の

短時間の自由では、風と空を生きる世界とする鳥だけが、友となれた。

「ひさし……ぶり」

「アイカワラズ！アリスハ、コトバガニガテ！」

既に膨大な数の鳥が囲んでおり、端から見ると、それは闇夜に浮かぶ雨雲にも見えるのだろう。

アリスは目的の場所へと向かいながら、暫し彼等との会話を楽しんでいた。

彼女に自分の感情が理解出来たのならば、楽しんでいたと言える。しかし、彼等との会話中、胸に宿る温もりの正体は何なのか、今の彼女に分かる筈はない。

鳥達も、自分達以上に純粋な心を持つが、残酷な運命と汚れた手を持つアリスが、哀れであり、穢らわしくも思うが、何よりも愛しいのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2934e/>

私が得た世界

2010年12月3日06時17分発行